

# 琉球大学学術リポジトリ

『ベトナムこども絵画展 ～  
戦争と平和・世界のともだち ～』：  
ワークショップ「ベトナム日帰りツアー」を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-19 キーワード (Ja): ベトナム, 国際理解教育 キーワード (En): 作成者: 那須, 泉, 吉田, 悦治, 村上, 呂里, Yoshida, Etsuji, Murakami, Rori, Nasu, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1067">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1067</a>

#### 四、アジアスタディー ベトナム／沖縄

### 『ベトナムこども絵画展～戦争と平和・世界のともだち～』

～ワークショップ「ベトナム日帰りツアー」を中心に～

那須 泉 (なす いずみ)

吉田 悦治 (よしだ えつじ)

村上 呂里 (むらかみ ろり)

#### はじめに

村上呂里

私たちは、教育学部学生や共通教育外国語科目でベトナム語を受講する学生を中心に、1998年度より毎年ベトナムへのスタディツアーを行ってきました。正規の授業としてではなく、希望者が自由に参加するという形をとっています。時に高校生も参加し、メンバーは異年齢で多彩、自由行動（自分の関心に基づき、自力で現地を歩き、人びとと交わる）が基本のゆるやかなツアーです。毎回共通のプログラムとしては、小学校訪問、ストリートチルドレンの支援NGO訪問（スタッフやストリートチルドレンとの交流）、そしてホーチミン戦争証跡博物館見学があります。（いずれも決して全員参加ではなく、関心のある人が参加します。）

「びっくりするくらい、違和感なく溶けこめた」というウチナーンチュの学生、カンボジアから渡ってきたストリートチルドレンと道ばたで座りこみ同じ目線で話す学生、ベトナムの植物や果物の種を集め沖縄での栽培を考える学生、那須さんお勧めの孵化しかけのあひるの卵Hot vit lon（屋台で売っている。栄養満点）をすっかり気に入った女子学生などなど、毎回さまざまな学生の姿が見られます。

「なぜ、ベトナムなのか？」については、もちろん参加者それぞれの思いがあるでしょうが、企画者側にはつぎのような思いがあります。

1つには、沖縄とベトナムは文化的風土的に似通い、共有するものがたくさんあるということ。沖縄からベトナムに行く誰もが、鳳凰木やガジュマル、デイゴなどの樹木、市場の風

景に「沖縄と似ている」という感想を持ちます。またベトナムは琉球王国と同じく中国冊封下にあり、中国文化の影響のもとに独自の文化を發展させてきました。グエン王朝の都であったフエには首里城と似た宮殿跡があり、火ぬ神などの習俗も似通っています。沖縄とベトナムは文化的にもたいへん縁が深いといえます。〈アジアの中の沖縄〉を考えると、ベトナムは欠かせない—そんな思いがあります。

2つは、沖縄とベトナムの歴史的な事情に由るもの。お互い大国に翻弄された歴史上の痛み（侵略・占領）を共有しあい、沖縄戦、ベトナム戦争という深刻な戦争の悲劇を体験しました。またベトナム戦争の際、多くの爆撃機が沖縄の米軍基地から飛び立ったことも、双方の人びとの記憶に刻まれています。そして今なお沖縄には広大な米軍基地があり、ベトナムには枯葉剤の後遺症に苦しむ子どもたちがたくさんいます。子どもたちの未来にわたる平和創造を願い、沖縄からの平和文化を探めるとき、沖縄とベトナムとの交流、とりわけ若い世代同士の交流は核心的な意味を担うのではないのでしょうか。

この2つ目の思いから、ホーチミン市戦争証跡博物館の見学をプログラムに位置づけてきました。この博物館には県出身報道写真家石川文洋さんの常設写真展もあります。1998年に開かれた世界平和博物館会議で沖縄にも来たことのある館長・副館長は、毎回沖縄からの訪問者である私たちをたいへん歓迎してくださいました。

このような交流を踏まえ2000年3月のスタディツアーの際、私たちは館長・副館長より『ベトナム子ども絵画展～戦争と平和・世界のともだち～』の沖縄開催の依頼を受けたのです。（資料1・2参照）

その場で見せてもらった子どもたちの絵（「枯葉剤で被害を受けたぼくの弟」「赤い髪どめをした獄中の女性」「世界の友だち」など）の力に魅せられ、私たちは即座にその実現のために力を尽くしたいと答え（てしまい）ました。

この絵画展の全体像については今述べる余裕はないのですが、絵画展の関連企画を考える際、実行委員会では〈過去—現在—未来〉という軸をもとにつぎの2つの柱を定めました。

(1) ベトナム戦争をめぐる〈過去—現在〉を掘り起こし見詰め、「沖縄にとってベトナム戦争体験とは何だったのか？」という問いを深めながら、ベトナムの子どもたちの絵を迎えよう。

(2) 未来を担う子どもたちが、ベトナムとまるごと出会い親しむ体験の場を創ろう。

ベトナム／沖縄から、過去を見つめ踏まえつつ子どもたちに明るい未来をひらきたい、そんな強い願いが実行委員会で共有されたのです。この(2)を具体化した企画が、くすぬち

平和文化館で行った「親子でいっしょにベトナム体験～『ベトナム日帰りツアー』」です。

この企画は、第1部ワークショップ「ベトナム日帰りツアー」（那須担当）、第2部くすぬち平和文化館副館長真栄城栄子さんによるベトナム紙芝居『太陽はどこから出るの』上演、第3部ワークショップ「ベトナム旅行のオリジナルフィルムづくり」（吉田担当）の3部からなります。くすぬち平和文化館の木の温もりに包まれたホールで、ベトナムのこどもたちの絵に囲まれて行いました。絵とともに、ベトナムのこどもの写真（新聞売りの少年や洪水後も元気に遊ぶこどもたち、水上生活の家族、小学校の教室風景、バナナの花の蕾を切る少女など）やベトナムの絵本や漫画・教科書類、アオザイ、布やかばんやお人形、こども向けに作成した沖縄とベトナムの歴史年表、「枯葉剤で被害を受けたぼくの弟」の絵と沖縄にある基地との関わりについての説明などなど、ベトナムを伝え感じさせるさまざまなモノや情報を展示しました。スタディツアーでベトナムに行った学生やベトナム語受講生などを中心に、学生も7名参加しました。

今回の『ベトナムこども絵画展』や関連企画のワークショップは、予め「国際理解教育に関わる教員養成カリキュラムづくり」を展望して行ったものではありません。が沖縄における国際理解教育を考えると、平和文化創造の観点からベトナムとの交流は豊かな稔りが期待され欠かすことができないと考えられます。またスタディツアーからの流れやワークショップのあり様など、教員養成カリキュラムづくりに資していく可能性を孕んだものであるといえるでしょう。本稿ではワークショップ「ベトナム日帰りツアー」の第1部（第Ⅰ章 那須担当）、第2部（第Ⅱ章 吉田担当）について、その意図や実際、こどもたちの反応、学生たちの関わりなどについて述べていきます。そのことを通して、今回の企画から国際理解教育に関わる教員養成カリキュラムづくりに資するものを汲み取っていただければと願っています。

## I. 沖縄発《アジアスタディー》の創造に向けて

～ワークショップ『親子でいっしょにベト

ナム体験 ベトナム日帰りツアー』の記録か

ら～

那須 泉

### 1. 目的

4歳から15歳のベトナムのこどもたちが描いた230点余りの絵画が沖縄に届けられた。

これを好機と捉えて並み一通りの展覧会でお終いにするのではなく、今度は沖縄のこどもたちがベトナムへ向かって行ける「場」を設定したかった。これが第1の目的である。

「枯葉剤で被害を受けた僕の弟」、「アメリカ軍の犯罪」等をテーマに描いたベトナムのこどもたちの想いや状況背景を、沖縄のこどもたちが直ちに理解することは容易ではないはず。ならば、絵画に囲まれた「場」で自分達がとにかくベトナムへ行ったように体感できる異空間／異時間を演出する。そして、沖縄での日常の杵をちょっと取っ払っただけでその眼前には同年代のベトナムの友達としゃべる・食べる・弾く・着る・嗅ぐ・ものを作る——バーチャルな情景が立ち現れてくることが実感できる「場」づくりを狙いとした。

第2の目的は、「沖縄」という土着性に連なる《アジアスタディー》の要素を盛り込むことであった。今日、異文化との対話や多文化との共生を目指す「国際理解教育」の実践事例は枚挙に遑がない。ただ、自分達が普段親しんでいる風土・習慣の外側にある「異」文化を、授業やワークショップという特別な時間と改まった舞台装置に駆り出してきてパフォーマンスをする「対話」や「共生」の効果には当然限界性が付きまとう。

しかし、沖縄の日常にはアジアの風土・習慣がここそこに息づいている。アジアとの関わりの「深度」の点で、大和とは決定的な違いがある。いわば地の利を活かして大和では到底実践できない《アジアスタディー》のワーク（後述する事例で言えば、★-1, ★-4, ★-6, ☆-7, ☆-8に相当する）を沖縄から創り出す緒にする狙いがあった。

### 2. ワークショップの実際

《絵を描いてくれたお友達のところへ行こう！ ベトナム日帰り旅行に出発!!》

日 時：2001年1月13日

場 所：くすぬち平和文化館（沖縄市安慶田）

参加者：約70名（安慶田児童館に通う小学生やおおぞら保育園園児が中心）

ファシリテーター：“ツアーコンダクター役”・・・那須 泉

“現地ガイド役”・・・フィン ゴック ヴァンさん（ホーチミン市戦争  
証跡博物館副館長）

※当日の実演時間が限られていたため準備をしながらも実演できなかったワークも少なくなかった。本稿では今後の参考に資するため未公開のワークも収めた。★印は公開済み、☆印は未公開のもの。

※略号一覧

[ ]：ワークの準備または状況設定

N：那須

V：フィン ゴック ヴァンさん

C：参加者

斜字：註釈

#### ★-1 沖縄からベトナムって遠いの？

[模造紙に沖縄島を中心に書いたアジアの白地図を提示]

N：「みんなが住んでいる沖縄はどこ？」

C：一同沖縄島を指差す。

N：「沖縄から一番遠い日本の都道府県は？」

C：一同北海道を指差す。

N：「じゃあこれから向かうベトナムは？沖縄からみてどちらの方角にあるのかな？」

C：自信ありげな男子1名だけが挙手。ぴたりと位置を当てヴァンさんは拍手して大喜び。

N：「出発前最後の質問。北海道の中心地札幌とベトナムの首都ハノイは、沖縄からだど  
っちが遠いかな？」

C：沖縄を起点にひもを使って沖縄から両地点までの長さを計り、ほぼ同距離であることを確認する（実際は約2400km）。

#### ★-2 出合いは「ベトナム語」で

〔現地ガイド役のヴァンさんへ皆一斉に「こんにちは！」…って挨拶してもすまし顔のまま（ヴァンさんは来日4日目で日本語はまったくだめ）〕

N：「ここはもうベトナム。だから人に会ったらベトナム語で話さなくちゃ」

V：「Xin Chao（こんにちは）」

「Toi Ten La Van（私の名前はヴァンです）」

「Xin Cam On（どうもありがとう）」

〔上の3つの挨拶を板書せず口頭で練習。ベトナム語は最も声調が複雑な言語の一つであるため、初めての学習者はベトナム語の音を聞いて早々にあきらめてしまうのが常である。ところが柔軟性豊かな音感と適確な聴覚を備えたこどもたちは、そんな「常識」をいともたやすくクリアして、早々にヴァンさんを相手に自己紹介の会話を競い合った〕

### ★-3 民族衣装の着付け指南

〔胸元の鮮やかな刺繍に腰上から左右にスリットの入った長いドレスと白のパンタロン — ヴァンさんが着ている民族衣装アオザイが、女の子達は気になって仕方がない〕

C：〔ワークショップ後のアンケートより 9歳女子〕

「ベトナムの女の人はアオザイばかり着るのですか？日本ではベトナムと違って洋服（ワンピース、Tシャツ、スカート、ズボン）がいろいろありますよ。」

〔会場に飾ってある赤いアオザイを使って、小学4年の奈々さんが代表して着付けに挑戦。ワークショップ参加後大学の留送会にアオザイ姿で出席して有名になった女子学生が丁寧に着付けの指南役を買ってでてくれた〕

### ★-4 カエルと沖縄三味線(三線)

〔会場内のピアノの上に木製カエル数匹発見！〕

C：「これが楽器!?! でもどうやって音を出すの？」

胴体に挟まっている棒でカエルの頭を叩いてみる。♪ ポコン、ポコン、ポコン♪

N：「それじゃあお坊さんの木魚になっちゃうよ」

V：「背中のいぼいぼを棒でこうやって擦ると…♪ゲロゲロゲロ♪」

N：「ベトナムでは年に3回もお米が取れる地域があるんだよ。年中田圃で〈ゲロゲロゲロ〉

が聞こえるからカエルさんが楽器になったのかもしれないね。」

「では、沖縄の楽器といえは何か？」

C：一同「三線」

[スタッフが三線でベトナム民謡「Mua Xuan Den (春が来た)」を弾く]

C：「でも、ベトナム旅行の時に何で三線が出てくるの？」

N：「それは、ベトナムのおかげで沖縄では三線が弾けるからさ」

C：「??？」

N：「三線の胴皮は（ベトナム南部に生息している）ニシキヘビの皮が使われていて、それは100% (!) ベトナムから輸入されているんだよ。もし将来ベトナムが沖縄にヘビ皮を売ってくれなくなったら、喜納昌吉さんは『花』を演奏できなくなってしまうかも…。」

#### ★-5. 不思議なベトナム人の手

N：「外国に来たらやっぱり買い物でしょう。これを1つ、2つ、いや3つ欲しいでしょ。ちょっと指折り数えてみて。」

C：一同指で数える。

V：不思議そうに眺めていたヴァンさんが「ベトナム人も5本の指だけ片手で10以上数えられるんですよ。指を折らずに各指の節の間を親指で押さえていけば1, 2, 3...  
・11, 12。」

ベトナムでは生れ年を年号より十二支で表わすのが通例である。片手で12まで数えられるベトナム方式ならば、相手との年齢差や干支を瞬時に判断することができる。

C：[ワークショップ後のアンケートより]

「ベトナムの数の数え方は、今まで見たことがない数え方だったのでびっくりしました。  
(9歳女子)」

「数の数え方にベトナム人の生活の知恵を感じました。(教育学部4年女子)」

N：「ここで少し休憩。果物食べようか。ナイフで皮をむいてくれる？」

C：女の子がりんごの皮をナイルでむき始める。

V：心配そうに見守っていたヴァンさんは、女の子と交代。ナイフの刃を外側に向けて(日本のむき方とは逆方向に)むいていく。

「皆さんのむき方は、刃先を自分の身体に向けるので大変危ないと思います。」

### ★-6 沖縄の野菜からベトナムのお菓子へ

〔数種類のベトナムのお菓子と、沖縄では一般的な野菜 — マーミナー（もやし）、緑豆、ウンチェーパー（空心菜）、シブイ（冬瓜）など — を机の上にを並べておく〕

N：「旅行の思い出にベトナムのお菓子を食べてみよう。但し食べた人はその原料を当てること。ヒントは全部沖縄で作られている野菜だよ。」

お菓子を種類毎に紙皿に盛って一人づつに渡そうとしたところ、皆が大挙して驚嘆みに食べ尽くしてしまった。これでワークショップは続行不能になった。以下は未公開部分。

#### 《お菓子その1：Banh Dau Xanh》

ベトナムで一番ポピュラーなお菓子。濃緑色の粉末を固め砂糖を少々加えた1cm角の正方形。口に入れるとすぐに溶けて粉々になる。お茶菓子に最適。

〔答え〕

マーミナーの種である緑豆。「Banh Dau Xanh」とは「緑豆菓子」の意。沖縄ではマーミナーはチャンプルー料理などで大和より多く食されている。緑豆自体も那覇の公設市場で見かけるし、緑豆でつくる「ぜんざい屋」もある。

#### 《お菓子その2：Mut Bi》

ベトナム正月のテト（沖縄の旧正月の時期）に欠かせないお菓子。5mm幅に短冊切りにし長時間煮つめてから砂糖をからめる。白色。

〔答え〕

シブイ。「Mut Bi」とは「冬瓜の砂糖煮」の意。かつて沖縄でも各種行事の際には供されていたらしい。作るのに大変手間がかかるので現在では那覇市で1軒だけ「冬瓜漬け」の名称で販売されている。

### ☆-7 臭い調味料と沖縄民謡

〔瓶入りのNuoc Mam（魚醤。タイのナンプラーと同種）1本を用意する。瓶の蓋をあける。たちまち会場内に悪臭が立ちこめる〕

C：勇気ある子が瓶口に鼻を近づけるが鼻腔を刺激する発酵臭で顔をしかめる。

N：「これはベトナムの調味料『ヌオックマム』です。ベトナム料理を作る時には必ず使い

ます。いわば日本の醤油みたいなものだけれど、原料が違う。『ヌオックマム』は小魚を塩漬けにして発酵させてできた液体の一番紋りです。では、その小魚は何でしょう？」

[沖縄民謡『谷茶前』を聞かせる：

♪ 谷茶前ぬ浜に  
スルル小ぬ寄ていていんどーへイ  
スルル小ぬ寄ていていんどーへイ  
ナンチャマシマシ  
ディアングァソイソイ  
ディヒヤングァヤクシク ♪

[谷茶の前の浜にスルルが寄ってきたぞ！スルルが寄ってきたぞ！（以下囃子）]]

N：実は民謡『谷茶前』に出てくるスルル（和名キビナゴ：体側面に幅の広い銀白色の帯を持つ体長10cm程の小型一般魚）です。沖縄ではてんぷらにしたり甘酢和えにして食べる普通の魚だけれど、ベトナムでは料理には絶対欠かせない調味料の原料としてのみ使われています。

## ☆-8 琉越折衷料理講座

[ヌオックマム、ライスペーパー、沖縄てんぷら、酢、砂糖、レモン、唐辛子、にんにく、水、調理道具（まな板、包丁、計量スプーン等）を用意する]

N：「旅の最後はベトナム料理。と言っても今日はここでしか食べられない和洋折衷ならぬ沖縄とベトナムのハイブリッド特別料理を紹介します。まず、レシピを見ながらさっきの臭かったヌオックマムを使ってたれ汁を作ってください。」

《たれ汁 Nuoc Chamの作り方》

- |         |          |
|---------|----------|
| ・ヌオックマム | 大さじ 4    |
| ・酢      | 大さじ 3    |
| ・砂糖     | 大さじ 3    |
| ・水      | 大さじ 5    |
| ・レモン汁   | 少々       |
| ・唐辛子    | 1本をみじん切り |

・にんにく すりおろして大きじ1/2

これらをすべて混ぜ合わせる。

C：レシピにしたがって作業開始。最初はヌオックマムの臭いに閉口するが、水その他の調味料を混ぜ合わすと臭いは気にならなくなることを理解する。

N：「ベトナムはお米が沢山取れる国です。だからお米の使い方もいろいろあって、この半透明の紙みたいなライスペーパーもお米から作ったものです（うるち米を水で溶いて薄くのばし蒸して乾燥させたもの。通常生春巻きの皮として使われる）。普通は春巻きを作る時に使うけれど、今日はこのライスペーパーを海苔巻き代わりに使ってみます。これが琉越特別料理たる所以。名付けて『ベトナムてんぷら巻き』。

- ・霧吹きでライスペーパーに水を少し吹きかけ柔らかくする。
- ・アチコーコーの沖縄てんぷらをライスペーパーで包む
- ・たれ汁 Nu o c Cham<sup>ヌオック チム</sup>をたっぷり浸して食べる

### 3. お詫びと提言

「はじめに」でも記した通り、今回のワークショップは「国際理解教育に関わる教員養成カリキュラムの開発」を念頭に企画したものではない。そのためワークショップの実施について、前もって学生へ積極的に呼びかけることもなく当日になってボランティアスタッフとして数名の学生に依頼するにとどまった。せめてアンケート用紙等で学生や参加した親子の方々からの意見／感想を掌握していれば、本稿にそれらを盛りこむことができたはずである。そのような配慮が当方に足りなかったがために、結果的に、関わった学生や参加者の声がほとんど反映されない跛行的な報告書になった点を切齒すると共にお詫び申し上げます。

「国際理解教育」の範疇で特に＜アジア＞に刮目するならば、沖縄という地場は極めて独創的で斬新なカリキュラムを開発できる未萌の機を感じてならない。＜アジア＞に力点を置いた「国際理解教育」を《アジアスタディー》または《アジア市民教育》と名付けて、その研究と実践を沖縄から積み上げていく意味は大きい。「2. ワークの実際」でおわりのように、大和<sup>オホミヅ</sup>では決して扱えない（または入手しにくい）素材を通して沖縄とアジアが繋がる事例は枚挙に遑がない。その一方、「沖縄は、地理的・歴史的・自然的にアジアに最も近く云々…」と、沖縄を説明する際のもはや手垢にまみれた枕詞・常套句と化している言辭をよく耳にするのも事実である。私が提言したいのは、沖縄とアジアを「形骸化した概念」で繋げるのではなく、具体的な「素材」や「ヒト」で繋がっていくような、そんな教材

を探し当てる地道な作業の大切さである。

「異」文化や「違い」との出会いを楽しいと感じ、ものの見方・考え方の幅を広げていく契機とするのが「国際理解教育」の狙いの一つである。沖縄における《アジアスタディー》との関連で言えば、相手 - アジアを知ること、自分 - 沖縄を改めて捉え返す契機にもなる。単なる「異」文化理解にとどまらず、相対化された「自」文化理解への展望とアイデンティティ意識の確立にも寄与するわけである。

既存の「国際理解教育」の方法論から学ぶべき点は大いにある。しかし、その空合いに荏苒として甘んじてはならない。これからは「隗より始める」気概を持って沖縄から新しい《アジアスタディー》の<sup>カリキュラム</sup>を創造し大和に提示していく - そんな流れに変えていきたい。

そこから、あらまほしい日本とアジアのあわいが構築できることを強く願う。

[参考文献]

沖縄琉球弧の旅	高沢皓司	社会評論社	1987年
東南アジアの日常茶飯	前川健一	弘文社	1988年
沖縄うたの旅	青木誠	PHP研究所	1995年
開発教育のすすめ	西岡尚也	かもがわ出版	1996年
地域と結ぶ国際理解	善元幸夫 他編	アドバンテージサーバー	1999年
ベトナムの事典	石井米雄 編	角川書店	1999年
ヴェトナム語の世界	富田健次	大学書林	2000年

## II. 「ベトナム日帰りツアー」の興奮と感動のお土産に・・・

～ ワークショップ「ベトナム旅行のオリジナルフィルムづくり」～

吉田悦治

今回の『ベトナムこども絵画展・戦争と平和・世界のともだち・』に参加し、ベトナムのこどもたちの思いや願いが詰まったたくさんの絵を迎えることができました。私自身、ベトナムのこどもたちのナマの絵の魅力に感動し、ぜひとも多くの人たちに触れてもらい、ベトナムとの出会いを一人ひとりのアンテナで感じてほしいと思いました。

こどもたち個々の作品のすばらしさもさることながら、ワークショップの企画に関わり、私のなかでもっとも印象に残り心を動かされ、またベトナムの魅力が私の琴線を振るわせた出会いがありました。それは実行委員会の中心メンバーである那須さんとの出会いでした。初めてお会いした時から、自己紹介や世間話もそこそこに、ベトナムに関するいろいろな面白話やクイズの嵐が飛んできました。那須さんお得意の笑いあり涙あり、もうひとつオマケに歌あり？の面白トークですっかり気分はベトナム旅行。ベトナムの食べ物や楽器、映画、アオザイ美女・・・など、さまざまなベトナムの文化や風土・歴史について、また沖縄とベトナムとの深い関係について話をしてくれました。その後も会うたびに、ベトナムの匂いをいっぱい感じさせてくれたのです。ベトナムに関して素人の私にとって毎回新鮮で、とびっきり楽しい時間で「もう、ベトナムに行くしかない、ベトナムに行ってみたい！」と思うようになったのです。その時の那須さんの、ベトナムのことを知ってほしい、ベトナムに触れてほしいという素直な眼差しに感動してしまいました。『ベトナムこども絵画展』に来て下さる方々にも、その感動を味わってもらいたいと思い、「ベトナム日帰りツアー」のワークショップを考えたのです。

旅行に出かけた時行った先々の映像を、旅の思い出にカメラやビデオで記録される方が多いと思います。観光名所でのスナップ写真に始まり旅先で出会った人々、友達・家族の笑顔や珍しい風景、つつい調子に乗って目に止まったモノ、何でもパチリッ！とシャッターをきる。楽しい旅の愛おしい瞬間を切り取って残しておけるのが写真や映像の良いところ。ワークショップ「ベトナム旅行のオリジナルフィルムづくり」もそんなノリでこどもたちに、

ークショップ「ベトナム旅行のオリジナルフィルムづくり」もそんなノリで子どもたちに、第Ⅰ部ワークショップで的那須さんのガイドによるベトナム体験の記憶を元に一人ひとりが自分の視点でオリジナルのベトナム旅行フィルムを作ってもらいました。作り方は簡単、まず子どもたちの目の前にたくさんのベトナムの新聞や雑誌をドンッと用意。ベトナムの新聞はカラフルなページが多く、記事と一緒にいろんな写真や広告が載っています。雑誌からもグラビア写真のベトナムの風景や料理、ファッションとともにベトナムのナマな映像が目を楽しませてくれます。それらの中から目に止まったものを次々にカメラのシャッターを切るように選んでいきます。そして、次に登場するのが幅広のセロファンテープ、そのテープを適当な長さに切り、お気に入りの写真や記事の上にペタッと貼り付けます。貼り付けたテープを少し指でこすった後、ペロンッと剥がすとテープを貼り付けた部分の印刷がテープにくっついてきます。それをつなぎ合わせると、フィルムの出来上がり。プロジェクターを通して大画面で映すと、本当に自分が撮影した旅行記のような気分です。それを見ていると日帰りツアーのさまざまな物語が生まれてくることでしょう。

作業が始まるとフロアはてんやわんやの大騒ぎ。お手伝いに参加してくれた学生たちの元へ、子どもたちがテープを受け取りに群がってきます。フロアの真ん中に置かれた新聞・雑誌の山も、あっという間に崩され四方八方に飛んでいきました。自分のスペースを見つけ腰を落ち着けたら、貼り付けたら剥がし、また貼り付けたらまた剥がし……。あっちこっちで子どもたちの眩きが聞こえてきます。

「このおじさんの服装、変なおー」

「この料理おいしそうー」

「これ学校じゃない？この子たち何年生かなあー」

「この乗り物、何て言うの？私も乗ってみたい」

「ハンモックで寝てるよー」

「この行列なんだろう？」

自分の背丈と同じくらいの長さにつなぎ合わされたテープをもって、子どもたちが集まってきます。そして、ベトナム日帰りツアーの上映会。

オリジナルフィルムに映されたものは、ベトナムの正月やシクロ（三輪タクシー）に乗っての市場巡り、伝統芸能の役者たちとその舞台裏、アオザイを着たベトナム美女、洪水に出くわした様子、ユーモラスな漫画、同年代のお友達……。おしゃべりをしながら一人ひとりのベトナム旅行記がスクリーンに映しだされました。子どもたちの創造力が我々にも新鮮

なベトナム体験として刻まれたように思います。そのフィルムを旅の思い出に持ち帰り、たくさんの土産話をお家の方々にしてもらいたいものです。大きな声を出したり、走りまわったり、どっと笑ったり、さっきまで見知らぬ人とお互いのアンテナで感じ合いながら考えたり、創造したり・・・。

私も学生たちもなんだか忘れ物を取り戻したみたいで、気持ちのいい楽しい時間を過ごすことができました。

「戦争」や「平和」という重苦しいテーマや「国際理解教育」という大げさな言い回しでなく、単純にこの展覧会やワークショップをきっかけに、ベトナムの匂いを少しでもナマで体感し、ベトナムを身近に感じてもらい、そこで得たベトナムの「種」をたくさんの人に持ち帰ってもらいたいのです。そしてそれぞれが今後違ったかたちでベトナムと出会う時、きっとその「種」は芽をだすのではないのでしょうか。

終わりに

スタイルも内容も三者三様の個性で書き上げたので、敢えてまとめません。この多声性の響きあいから生まれるものを出発点に、今後とも「ヒト」と「ヒト」の繋がりを大切にしながら《アジアスタディー ベトナム／沖縄》の内容を多彩に紡ぎだしたいと考えています。そうしていつかアメラジアンスクールでもワークショップを行えたらと願っています。ベトナムにもアメラジানেরこどもたちは存在しますし、アメラジアンスクールで学ぶこどもたちのおじさんやおじいさんはもしかしたらベトナム戦争に出かけたかもしれない…。

こどもたちの絵の喚起する力やベトナムのこどもたちの今と沖縄のこども・学生たちとの出会い・対話等についても深めたいのですが、つぎの課題とします。

最後に参加した学生の感想をいくつか記して、終わります。

◆ベトナム体験、ものすごく楽しかったです。ですが、あまりにも衝撃的な、ベトナムの子供達との出会いでした。自国に起こっていること、過去に起こったこと、これからのことを真剣に見つめている子供達。ベトナム戦争から約30年。日本での戦後30年で日本の子供達は、ベトナムの子供達のようにここまで考えられたのでしょうか？

赤い髪止めの女性の絵、枯葉剤の影響をうけた弟の足の絵、未来の自国の絵、それらは、

大人達から確かな自国の歴史、世界の状況を受けとった子供達の目を通した「ベトナム」なのでしょう。

これから、子供を持つ親、もしかしたら教師になるかもしれない私に、「伝えること」の大切さを教えてくれた体験でした。（教育学部3年生）

◆外国といえば、アメリカ、ヨーロッパのイメージが強くある中で、今回のような日本と同じアジア圏のベトナムに触れる機会ができたことが、とても良かったと思います。親子でベトナムへ日帰りツアーで参加でき、ベトナム人のバンさんや現地に詳しい那須先生のベトナム案内で、言語や地理・文化について楽しく知ることができました。旅の思い出として、ベトナム新聞をテープを使ったフィルムづくりでは、誰もが熱中して作業に取り組んでいました。本を見たり、TVで見る・聴くだけの理解では得られないようなものが、今回のワークショップにはあったと思います。（教育学部3年生）

◆・メッセージ（注 くすぬち平和文化館で、ベトナムのこどもたちの絵を見た沖縄のこどもたちに、自由にベトナムのこどもたちへのメッセージを書いてもらいました。今回も紹介しなかったのですが、ヴァンさんが喜んで、ベトナムに持って帰られたので、紹介できませんでした）の紙に、ドラえもんのイラストを描いている子どもがいたのだが、ベトナムの子どもも、日本の子どもも知っているドラえもんのイラストを描くことによって、共有しているものがあることを伝えたかったのでは、と思った。

・子どもたちが楽しそうに活動しているのを見ると、この「ベトナム日帰りツアー」に参加することによって、よりベトナムを身近な国として考えるようになったのでは、と思う。またベトナムの子どもが描いていたベトナム戦争のことについても、考えるようになると思う。

・子どもにまじって、フィルム作りをしたけど、自分だけのオリジナルフィルムができて楽しかった。

・子どもの絵を見ていると、ベトナム戦争や世界の平和について、しっかり考えているんだなァと思いました。（教育学部4年生）

◆私は、この企画に美術科の吉田先生の手伝いとして参加しました。すべての先生方のお話もリクレーション等も楽しく参加することができました。

何よりも私にとっては、ベトナムの子どもたちの絵を見れたことがとても心に残っています。

私はベトナムの歴史や現状など、くわしいことは何も知らないのですが、ベトナムの子

どもたちの気持ちをそのままぶつけられた絵は、ベトナムの今や昔がリアルに感覚として受け取ることができました。今後も、こういう企画を続けていってほしいです。（教育学部3年生）

（附記）

『ベトナム子ども絵画展～戦争と平和・世界の友だち～』およびワークショップ「親子でいっしょにベトナム体験～ベトナム日帰りツアー」の開催に対するくすぬち平和文化館館長真栄城玄徳・栄子ご夫妻の惜しみないご協力に厚く御礼申し上げます。

### ワークショップの風景

